②施設整備の方針について

■自由で活発な活動を支える快適な室内環境

1. 多様な学習内容・学習形態に対応できる教室廻り

- 1) 南向きの普通教室「CR」+オープンスペース「OS」
- ①**学習空間** (クラスルーム): 教師が環境を整える 高機能・多機能な 魅力ある「学習」環境づくり
- ②**生活空間**(オープンスペース): 子どもたち自身でつくり込める 温かみの ある落ち着いた「生活」環境づくり

教室に併設するオープンスペースは、**ホームベースへの転用**を想定



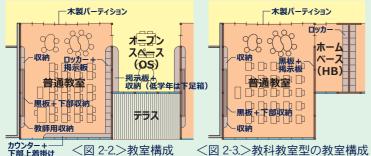
多目的教室:

少人数学習、グループ学習、アクティブラーニングなど多様な学習に対応。将来的に普通教室にも転用可

ーデン、ベンチ: 児童、生徒の居場所

- **オープンスペース(OS):** 収納、掲示板を設えた学 習・展示スペース。ホーム ベースに転用可能

<図 2-1.>教室のまとまりと教室廻り



2. アクティブラーニングを促す教育環境づくり

1)主体的・協働的な子どもを育てる環境

相手の話を聞き、自分の考えをしっかり伝えることのできる力が育つように、学びやすい教室のしつらえとともに、友とふれあえる「アルコーブ」など、校舎内に**多様な居場所**をつくります。

2) いつでも、どこでも学べるICT環境

高機能化、校内 L A Nの整備など、子どもたちの情報活用能力の育成を図ります。「メディアセンター」や「教科メディアスペース (MS)」など、情報を活用しやすい環境を整備します。

3) I C T に対応した高機能な普通教室

机周りに子どもたちの荷物を置かなくて済む環境。 教室前面の設備・ 収納整備(現状教室の実態調査を実施+今後の与見により立案)

3.優しさと笑顔のもととなる心地よい空間をつくる

1) 柔らかで温かみのある , 調湿効果も ある内部空間の木質化

子どもたちが触れる壁,床や家具などに木を多用し、見た目も温かみのある環境をつくります。



・冬に陽のあたる暖かい教室。夏場はカーテンを

<写 2-1.>弊社設計事例 (中学校

閉めなくて済み、明るさとともにさわやかな風,景色を楽しめる教室。 ・ハイサイドライトや中庭など自然光を制御して、共用部にも積極的に採光。

- ・中間期の自然通風システム(屋外の気温、湿度、風速などを感知し作動)
- ・空間に応じた効率的な空調システム。CO2の削減効果をモニターで確認できるなど、子どもたちのエコ意識を促す「見える化」を行います。



<図 2-4.>異学年とのふれあいを促す昇降口・メディアセンター(図書室・PC室) イメージ

■地域開放しやすい校舎ゾーニング

1. 開かれた施設、そのための「セキュリティ」

- ①地域開放しやすいゾーニング:屋内運動場、特別教室など開放エリアを設定しやすい。管理区域の明確化+段階的な開放を容易にします。
- ②外来者チェック:出入口明確化+視認性=管理ゾーンから地域開放時の入退が把握しやすい位置関係
- ③地域交流ラウンジ: ランチルームに隣接配置。 子育て世代の サークルや地域のイベント、ギャラリーなど地域活動の拠点に



■災害時にも安心できる学校

1. 地震に強い構造設計

震度 7 クラスの地震でも機能確保できる構造計画。非構造部材 (天井・設備機器・家具)の耐震性能は配慮すべき重要項目

2. 災害時の避難施設として

屋内運動場を中心として効率的に防災拠点機能を集約します。 多様な年齢層(身障者、高齢者や乳児、伝染性疾患)を受け入れるために、1Fの特別教室(ランチルーム、家庭科室、和室等)も避難施設として開放することを想定します。

①**セキュリティ管理**:避難時の出入を「地域交流ラウンジ」出入口に限定、昇降口と切り離し、学校の早期再開を可能に。

②避難施設として有効な諸設備:マンホールトイレ、その近く



■年齢・体格差、健康、バリアフリーなどへの配慮

1.年齢に応じた生活圏と共有空間のゆとり

1) 学年固有空間と共用空間、それぞれの使いやすさ 小学低中高、中学生の教育課程や学習活動の相違に応じた、大 まかな生活圏の確立に配慮します。特に、小さな子どもが安心して 学び遊べる環境を各学年の教室廻りに用意します。一方、共同利 用の多い特別教室などにおいては、掲示板など発表の場にゆとりを持 たせる、見通しの良い安全性の高い廊下などに配慮します。

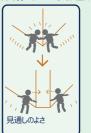
2) 危険個所の排除

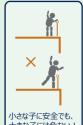
- ①集中動線は特に気を配り、十分な階段幅員や踊り場、ところどころにアルコーブ状の退避ゾーン設置など、**体格の異なる子どもたちの共有の仕方**に配慮します。
- ②出会い頭の衝突防止のために、廊下の曲がり角を隅み切りするなど、 **危険察知しにくい個所をつくらない**ように心掛けます。
- ②角張った部分をなくす、ガラスの前に衝突防止の手摺を付けるなど、**徹 底した安全設計**を行います。
- ③階段手摺など、落下防止は体格の大きい子どもや大人を基準にします。

2. 利用頻度を踏まえた家具設計・選定

1) 共用部の家具(椅子、テーブル)など

メディアセンター、 ランチルームなど幅広い年代が使う家具は特に検討を要します。 関係者間で協議し、 子どもたちが使いやすい高さ・大きさなどを設定します。 体格の小さい子どもも利用するので、 足掛けタイプ の椅子を選定するなど。 種類を多くしすぎると、 配分の適否、 管理 煩雑などの問題があるので、 入念な現状調査とヒアリングを実施します。









<図 2-8.>年齢、体格差に配慮した具体例

3. 障害をもつ子どもにやさしく、居心地の良い学校

1) 小中学の普通教室と同じ 南向きに並列配置

他の子どもたちと同様に学習、日常 生活が送れるように配慮します。 昇 降口やエレベーターに近い位置に。

2) 教室内のつくり込み方を工夫 落ち着いた小教室とオープンスペース (OS) の組合せ(右参考事例)。 教師コーナー、教室内トイレの設置 など、この学校ならではの教室を検 討します。



<写 2-2.> 弊社設計事例: 8m×8mの教室ではなく、子ども の人数に応じた小教室とオープンス ペース(OS)の組合せ。OSに 収納や掲示板を設置、小教室 は学習空間に特化

4.全ての子どもにやさしい健康な学校

1)健康にやさしい建材を選ぶ

- ・シックハウス症候群などに配慮した建設材料を選び、なおかつ完成後に測定による安全確認を行います。
- ・カーペットなどのように埃が堆積しやすく、アトピー性 皮膚炎などの子どもに好ましくない建材も避けます。
- ・内装材は木を活かし、体と心に優しく、子どもたち が落ち着いて生活できる環境をつくります。



<写 2-3.>床に座り 本に夢中の子ども